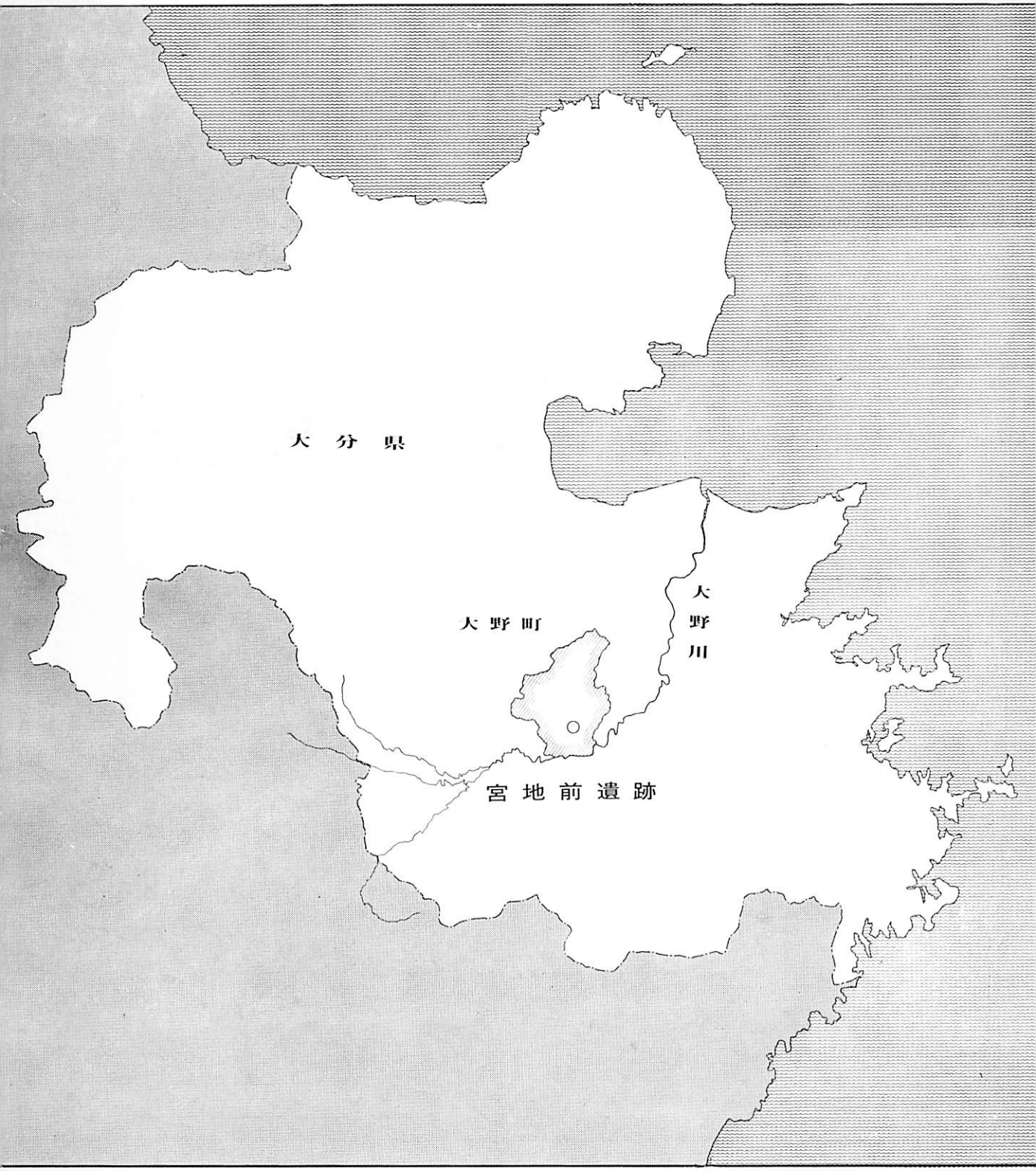
大分県大野町
宮地前遺跡発掘調査概報



1973

平安博物館

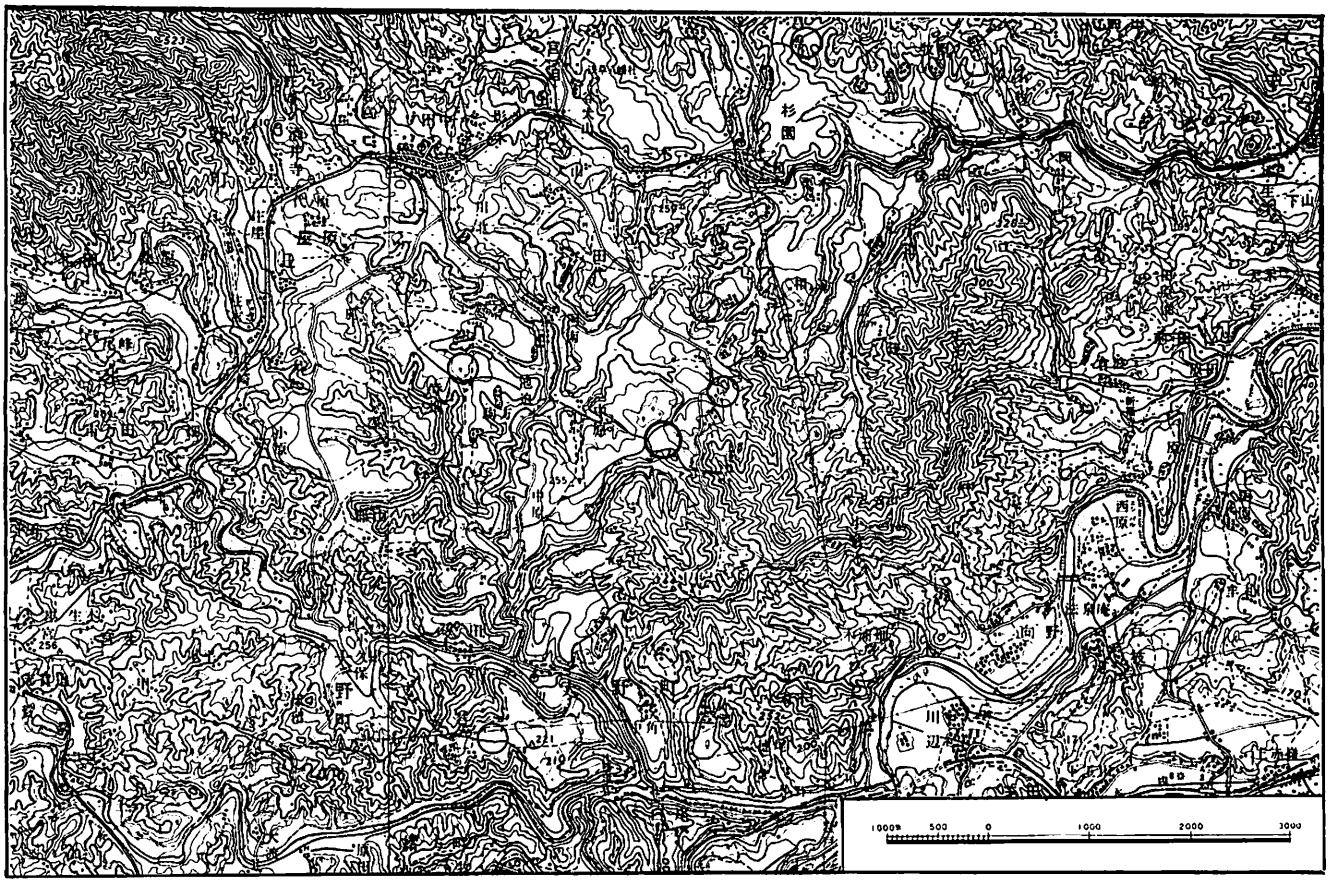
はしがき

大分県大野郡大野町大字片島字宮地前に存在する本遺跡は，縄文時代晩期の黒色磨研土器を主体とする遺跡である。その発掘調査は，平安博物館が考古第二課を担当課として実施中の，『日本文化の源流の研究』に基づくものである。

本研究の主旨は，縄文時代に農耕が存在したのではないかという仮説の重要性を，日本文化の源流が縄文時代に遡り得る可能性を明確に指摘した点に認め，かつ問題の深化をはかるために，単にその仮説の可否を論じるにとどめず，多面的かつ総合的な視野からの検討に寄与し得る資料を整備することにある。

水稲栽培の開始された弥生時代直前の縄文晩期には，大まかにみて西日本の御領文化と東日本の亀ガ岡文化が併存したが，後者については1971年4月及び8～9月にかけて，青森県田子町石亀遺跡の発掘調査を2次にわたり実施して，多大な成果を挙げることができた。これに対比すべき資料を得ることを目的とし，緒方町大石遺跡をはじめ代表的な黒色磨研土器文化遺跡の集中する大野川流域より，該文化研究に造詣の深い別府大学賀川光夫教授等の御助言を得て，宮地前遺跡が選択されたのである。

はじめに本研究の主旨に賛同され寄附金を寄せられた方々に，銘記して謝意を表する次第である。



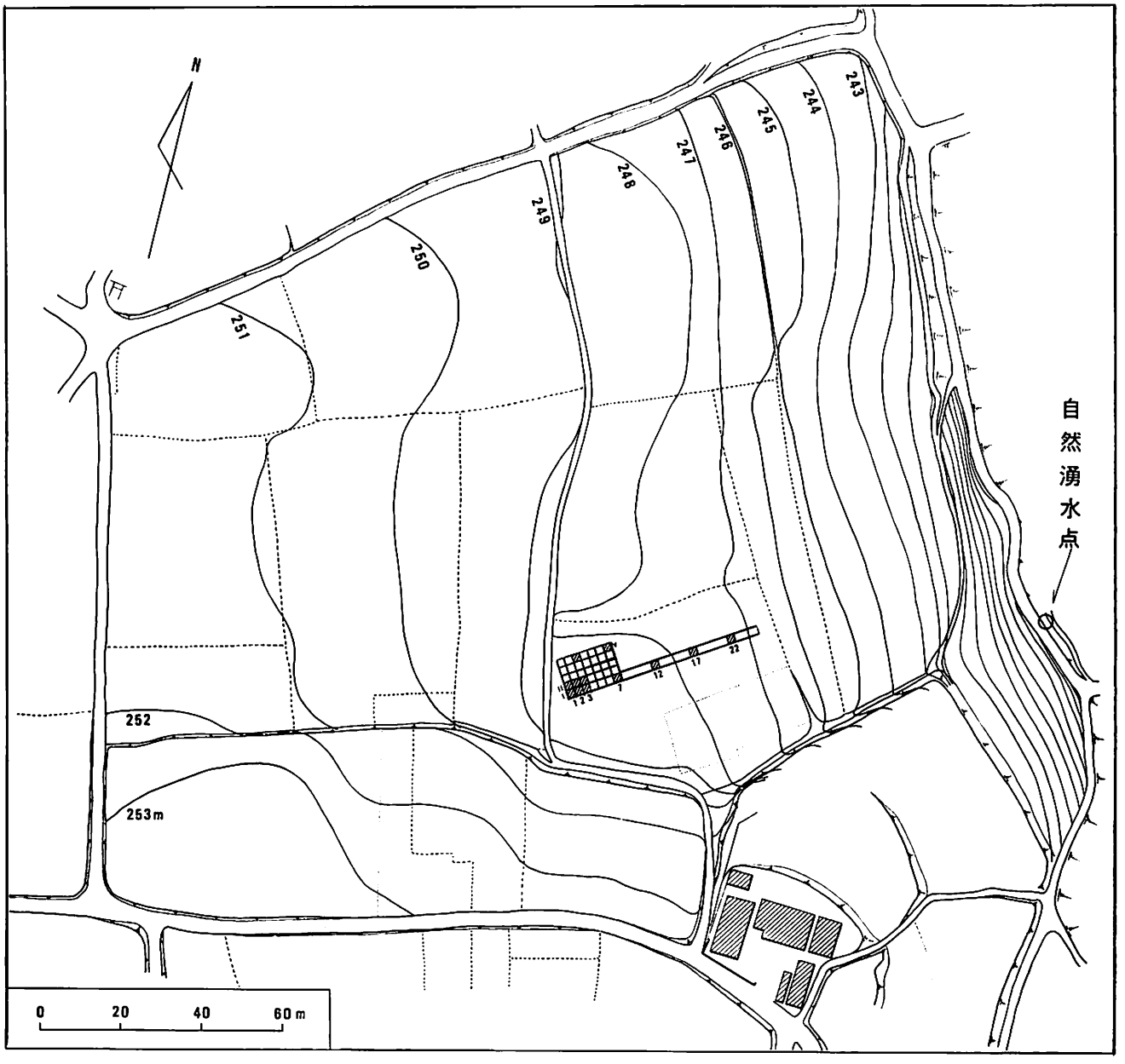
宮地前遺跡の位置　宮地前遺跡（中央○印）は大野川左岸の丘陵上に位置している。周辺には西北西約2kmの駒方遺跡をはじめ，若干の晩期の遺跡（○印）が分布している（8頁参照）。大野町の中心地田中より東南約3.5kmである。

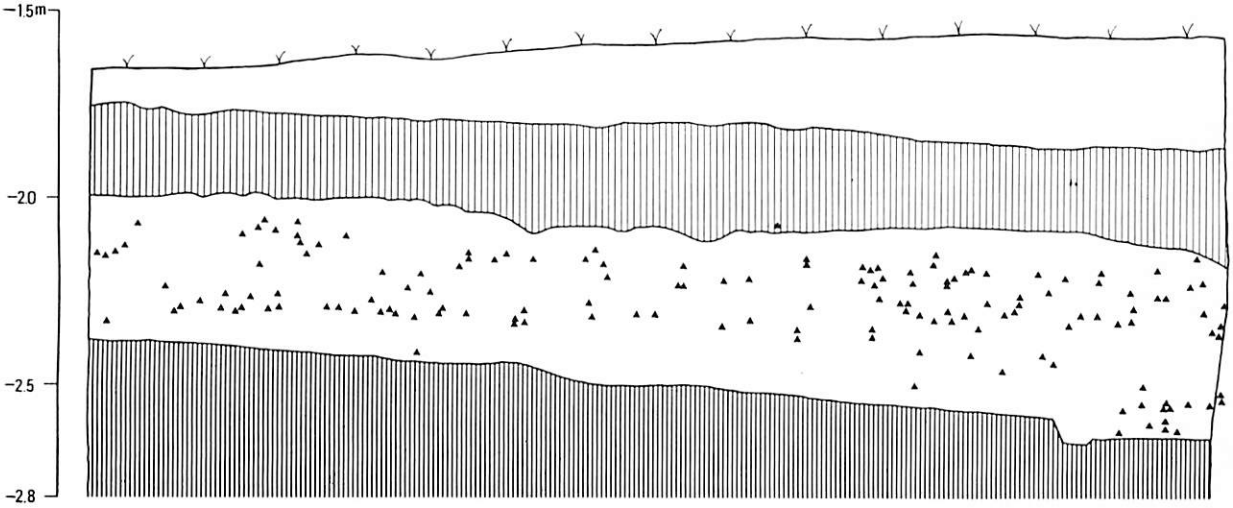
発　掘　調　査

宮地前遺跡の立地する台地は，東側と南側とに特に深い谷がめぐっている。当初広範囲に試掘を行ない，有望な地点に調査を集中する予定だった計画は，連絡に若干不備があり変更せざるを得なかった。このためまだ煙草の苗の植付が行なわれていない東南部の畑地のみを発掘することにした(1973年３月26日)。

３月27日，畑地の中央に２×50mの第Ⅰトレンチを設定。等間隔に２・７・12・17・22区を発掘し，２区に遺物が集中していることが判明したため，第Ⅱ～Ⅴトレンチを西寄りに設定した。第Ⅴトレンチ２・７区の発掘結果では遺物が少なく，第Ⅰトレンチ寄りに調査を集中する必要を感じ，第Ⅱトレンチ１～３区を発掘。この第Ⅰ・Ⅱトレンチの１～３区が遺物の集中度が高く，遺構の存在を推定させた。また４月４日にⅠ７区のローム層より細石核などが出土したこともあって，特にⅠ３・Ⅱ３区をローム層まで掘り下げたところ，最終日前日の６日に竪穴住居址の一角を検出できた。

遺跡地形実測図





第Ⅰトレンチ１～３区北壁断面図
上より１～４層
（深度は S.L.250m を
基準とす。以下同じ）

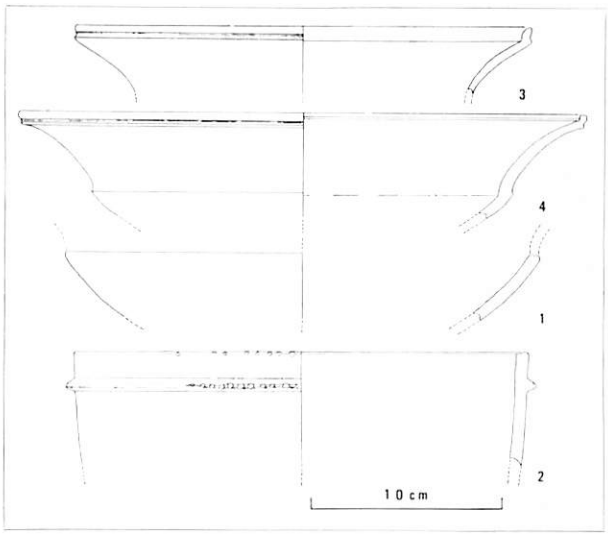
層　　位

第１層　耕作土層。厚さ約 30 cm。

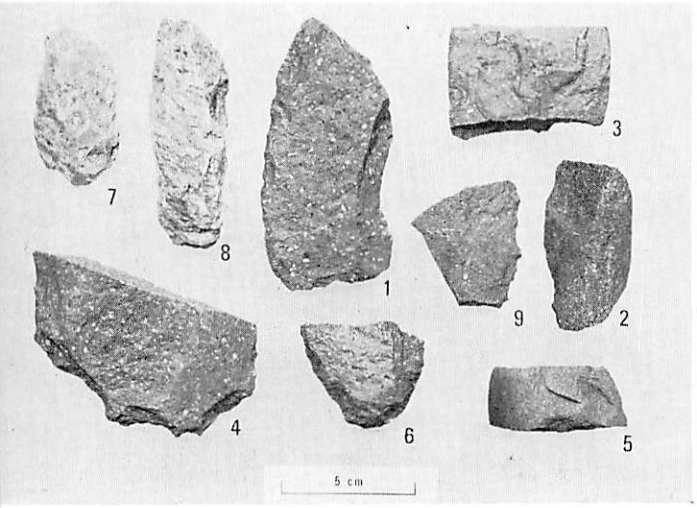
第２層　厚さ 20～70 cm。黒褐色～黒色土層。他層と異なり東へ向うほど薄くなる。撹乱層。

第３層　暗褐色土層。厚さ 80～180 cm。東へ向って急激に厚くなる。上図にⅠ１～３・Ⅱ１～３区出土の石器のレベルを投影したが，－230 cm 付近を境に急激に出土しなくなる。これより下部は石器のみならず，土器片も急減し無遺物層の観を呈す。上部出土の遺物は縄文晩期Ⅰ式土器を主とするが，若干弥生式土器も混じる。

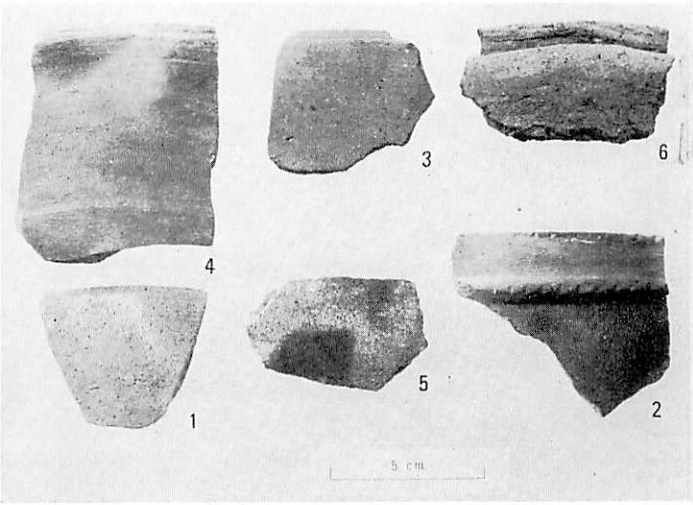
第４層　黄色ローム層で，上部に旧石器時代の石器を出土する。



竪穴住居址内出土土器実測図



竪穴住居址内出土石器

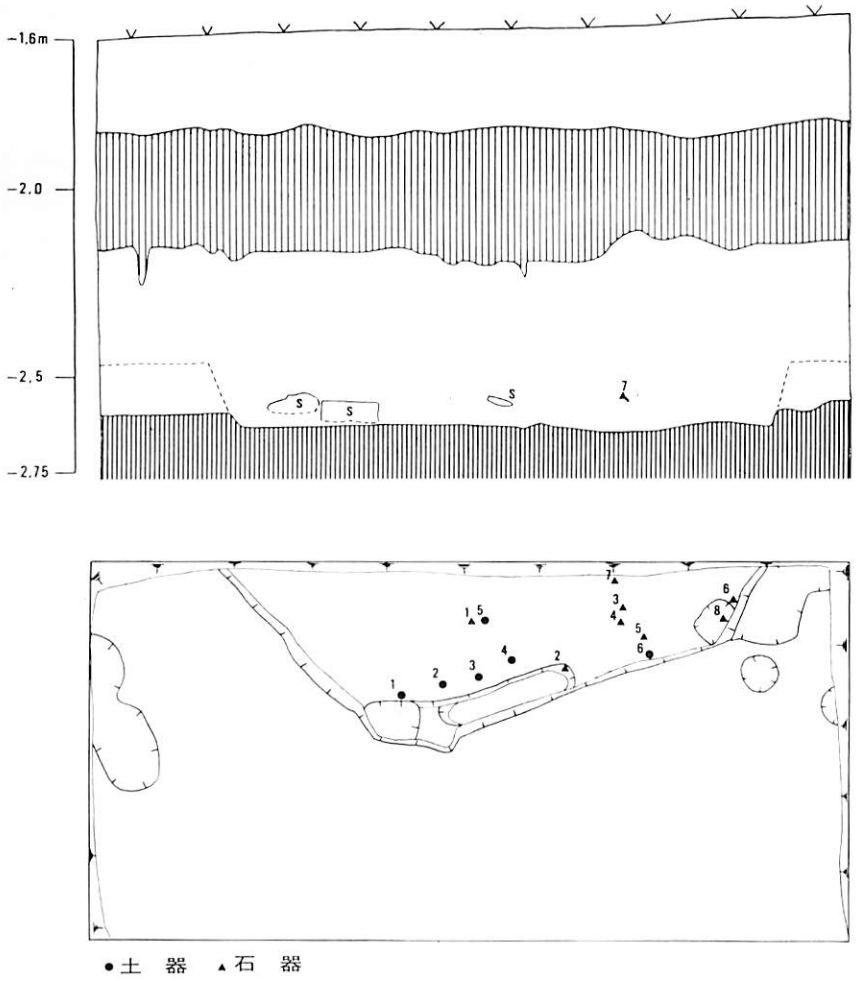


同土器片

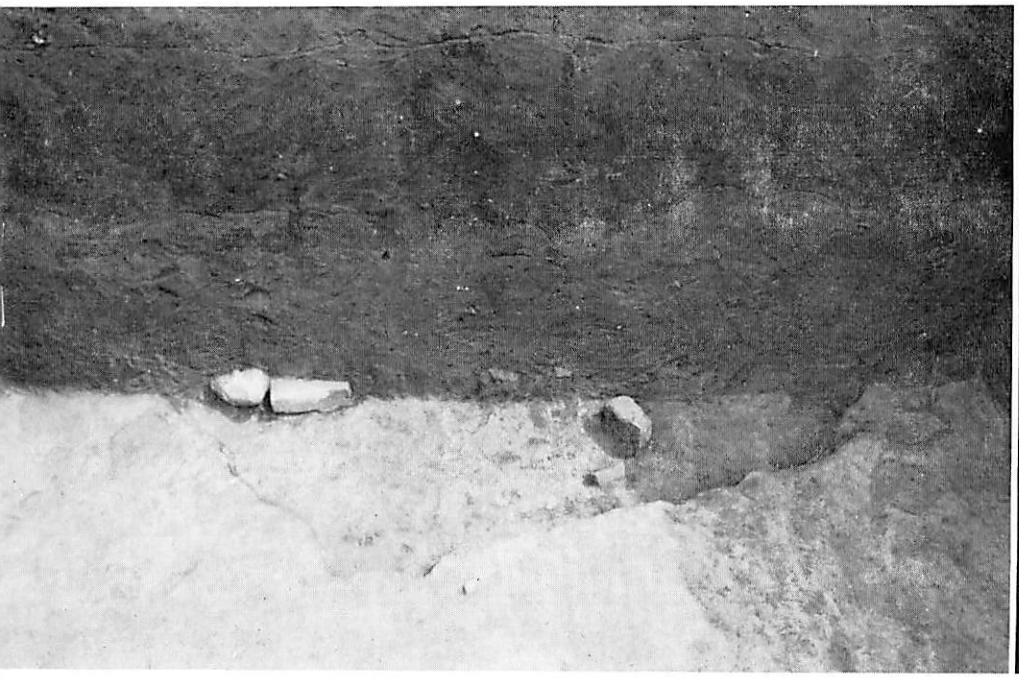
竪穴住居址

Ⅰ７区のローム層上部より出土した旧石器時代の石器類が，西寄りに偏していたことが直接の契機となり，Ⅰ３・Ⅱ３区をローム面まで発掘したところ，これを約 10cm 掘り下げた竪穴住居址の一角を検出した。しかし実際の壁の掘り方は，第３層中の遺物減少面からと推定される。時間切れとなりそのプランは確認できなかった。

覆土の中（ローム面からに限る）から出土した遺物は，左頁写真等に示すように，石器は打製石斧を主とし，土器は縄文晩期Ⅰ式を主とする。しかし下城式も混じ，弥生時代竪穴の疑いもある。しかし量は少なく，局部的な攪乱も考えたい。解決には全掘を必要としよう。



竪穴住居址及びⅠ３・Ⅱ３区東壁実測図（遺物番号は左頁写真等に一致）



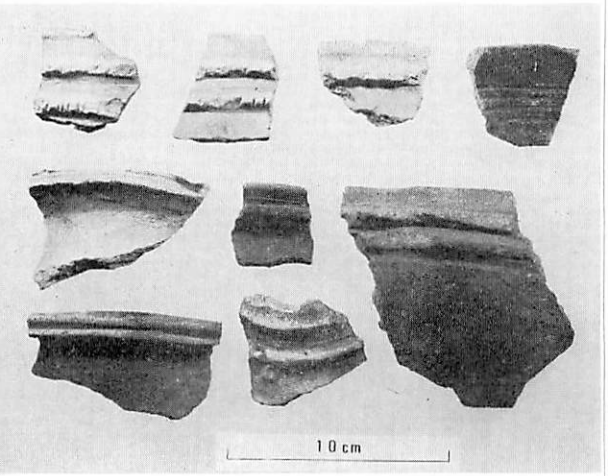
竪穴住居址発掘状況（左・西より，右・北より）

土　　器

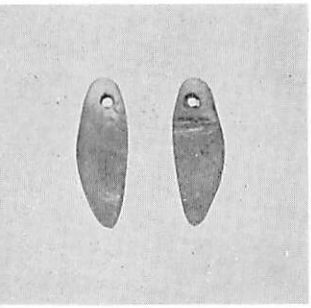
第３層及び第１・２層より出土した土器片は，縄文晩期Ⅰ式（大石式）を主体とする。縄文土器では他にごく微量の前期・曽畑式，後期西平・三万田式も認められた。器形は深鉢・鉢・浅鉢がみられ，口縁部・胴部の屈曲や横走沈線，及び黒色研磨の技術などに，晩期Ⅰ式の特徴が顕著に認められる。標式遺跡である緒方町大石遺跡は，西南約 16 km に位置する。

晩期の土器の他に，若干の下城式等の弥生式土器が混在していることが注意される。当遺跡ではこれらを層位的には識別できなかった。竪穴住居址覆土にも少量みられることから，弥生時代にどのような攪乱があったのか，特に第３層出土遺物について検討を進めるなかで，解決の緒口をみつけてゆきたい。

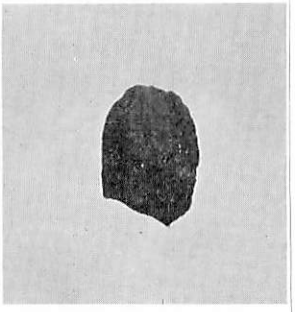
土器及び右頁他に示す石器以外の遺物として，管状土錘，滑石製のペンダント及び落葉性ドングリであるミズナラの種子が出土している。



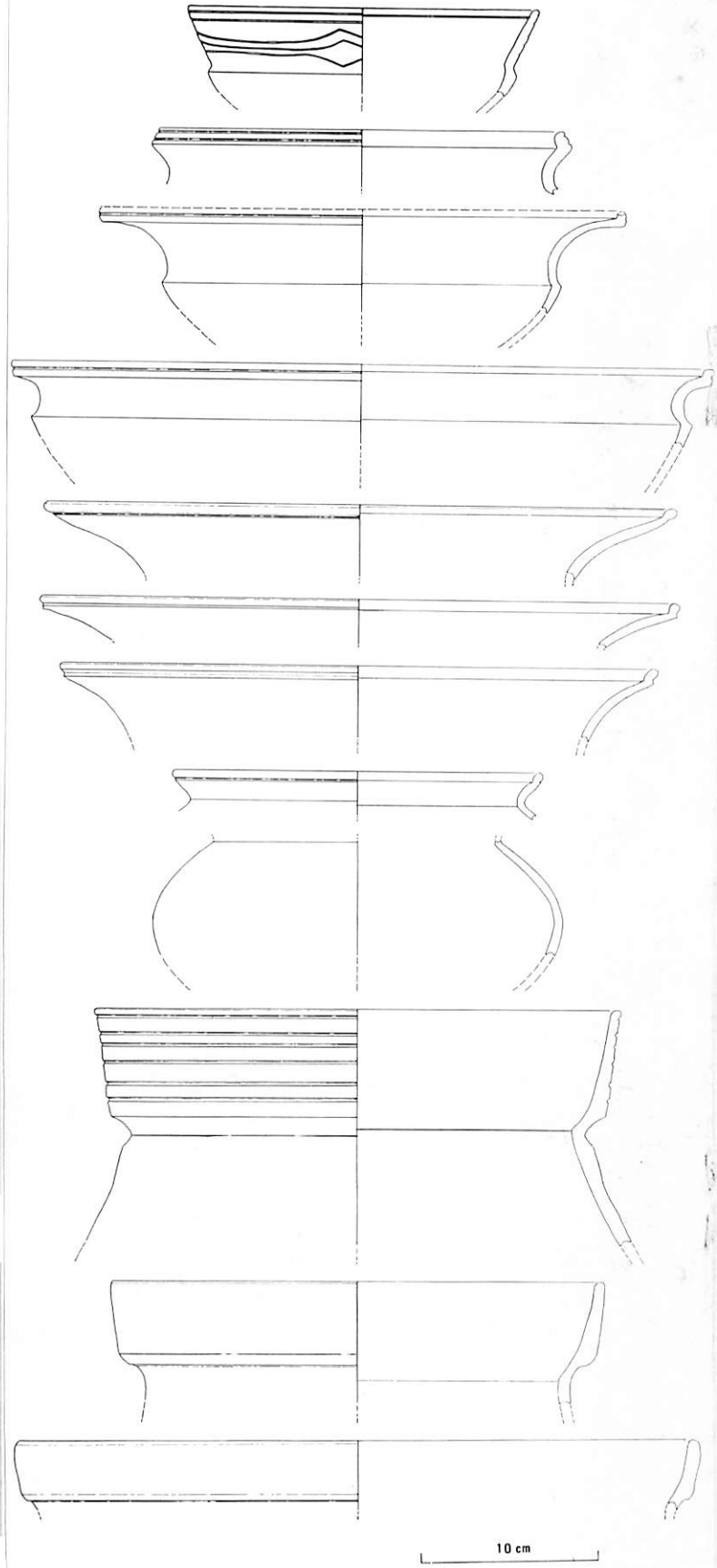
弥生式土器



ペンダント



ミズナラの種子



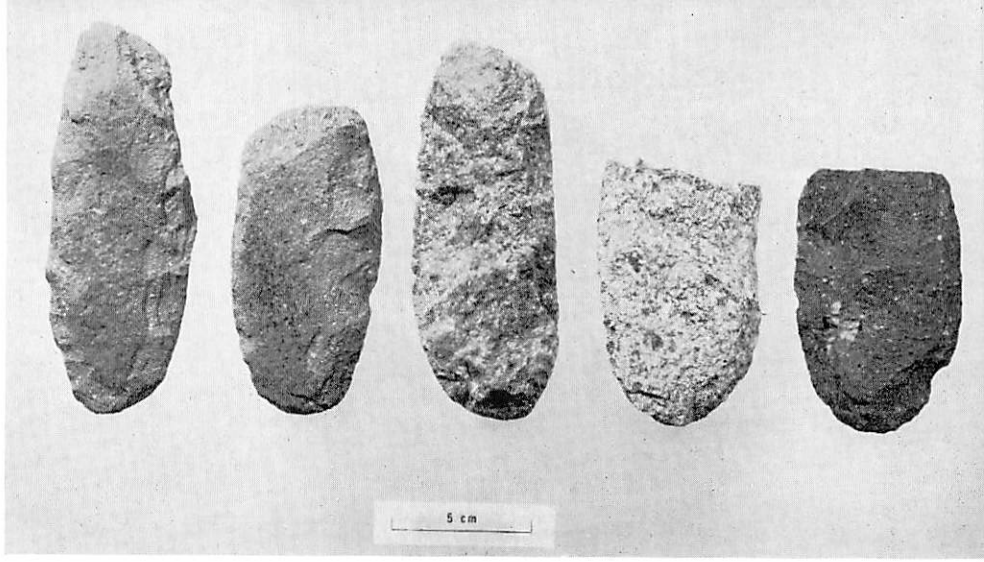
縄文土器実測図

石　器

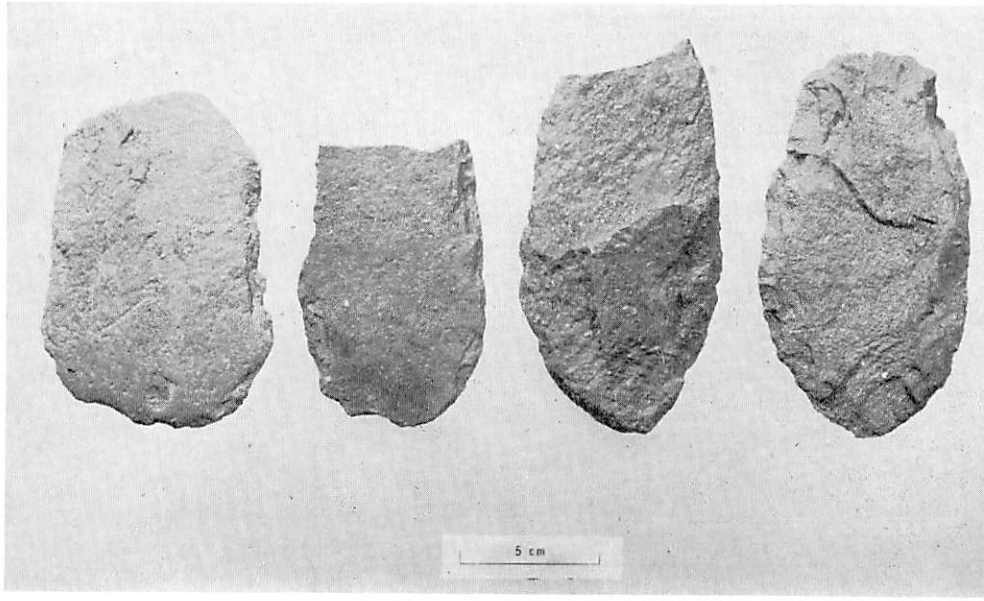
旧石器類を除く出土石器の概数は次のとおりである。

打製石斧（245）
磨製石斧（4）
石鏃（12）
ポイント（1）
スクレイパー（4）
礫石錘（1）
敲石（2）
磨石（5）
縁のない石皿片（2）
砥石？（1）

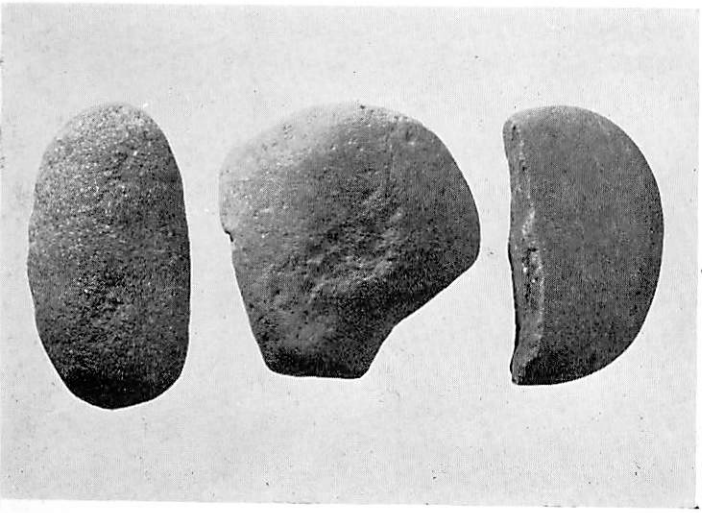
概して九州晩期の石器組成を良く示すが，賀川教授のいう打製石庖丁の欠除することが注目される。当遺跡の特殊性であろうか。打製石斧は，東日本と同型の短冊形石斧（A類）と，九州晩期に特徴的な扁平石斧（B類）とに分けられる。このB類及び打製石庖丁を除くと，東日本中期の石器組成に近似することも注目される。



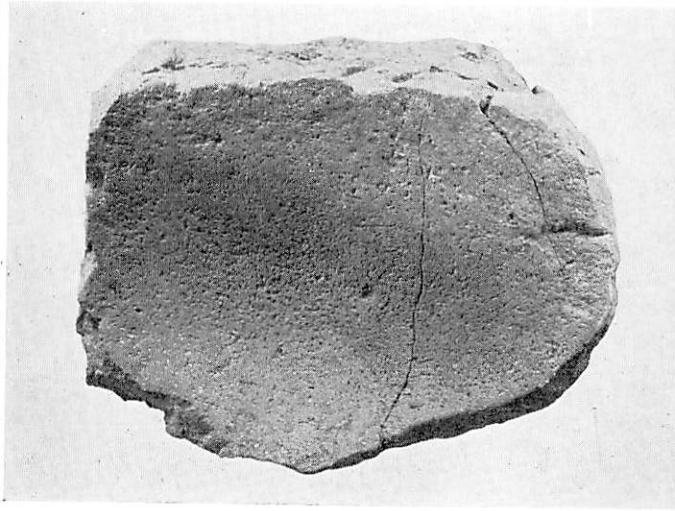
打製石斧　A類



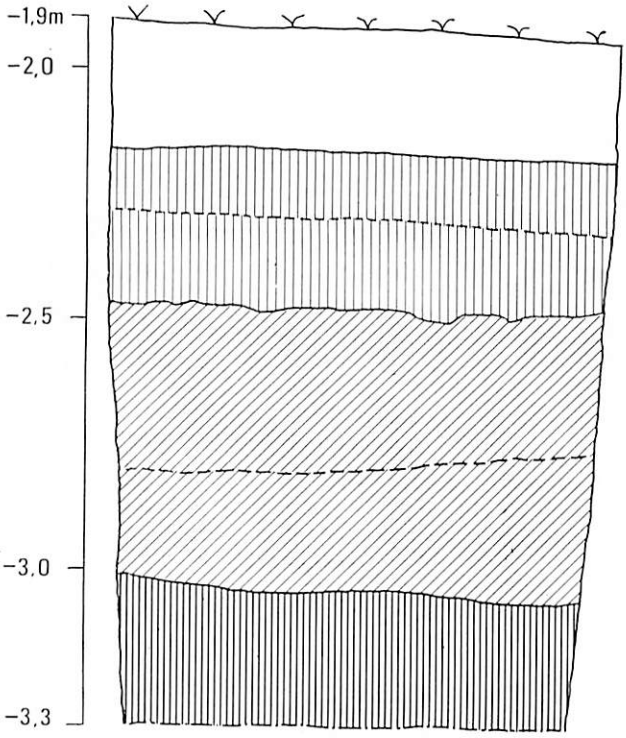
打製石斧　B類

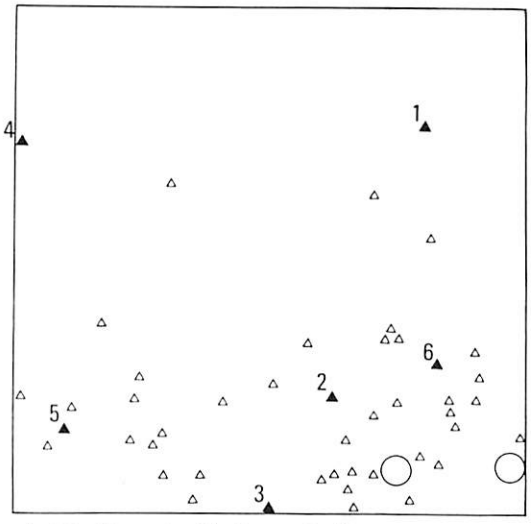


たたき石（左2点）とすり石（右）



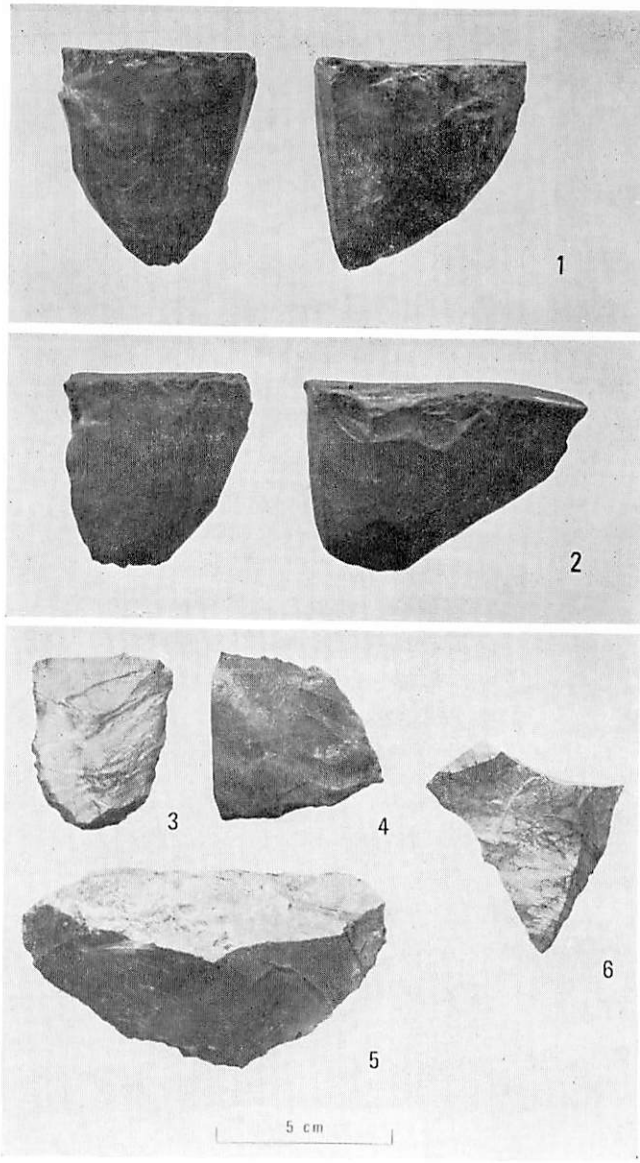
石　皿（横 30.5 cm）



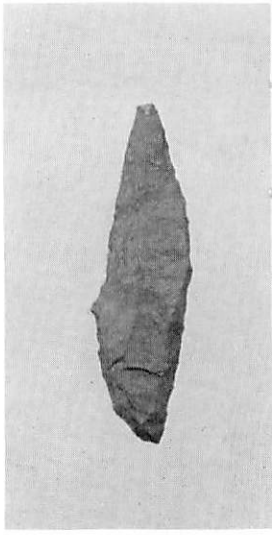


▲石　器　△剝　片　○礫

Ｉ７区における石器類の出土状態と層位（番号は右写真に一致）



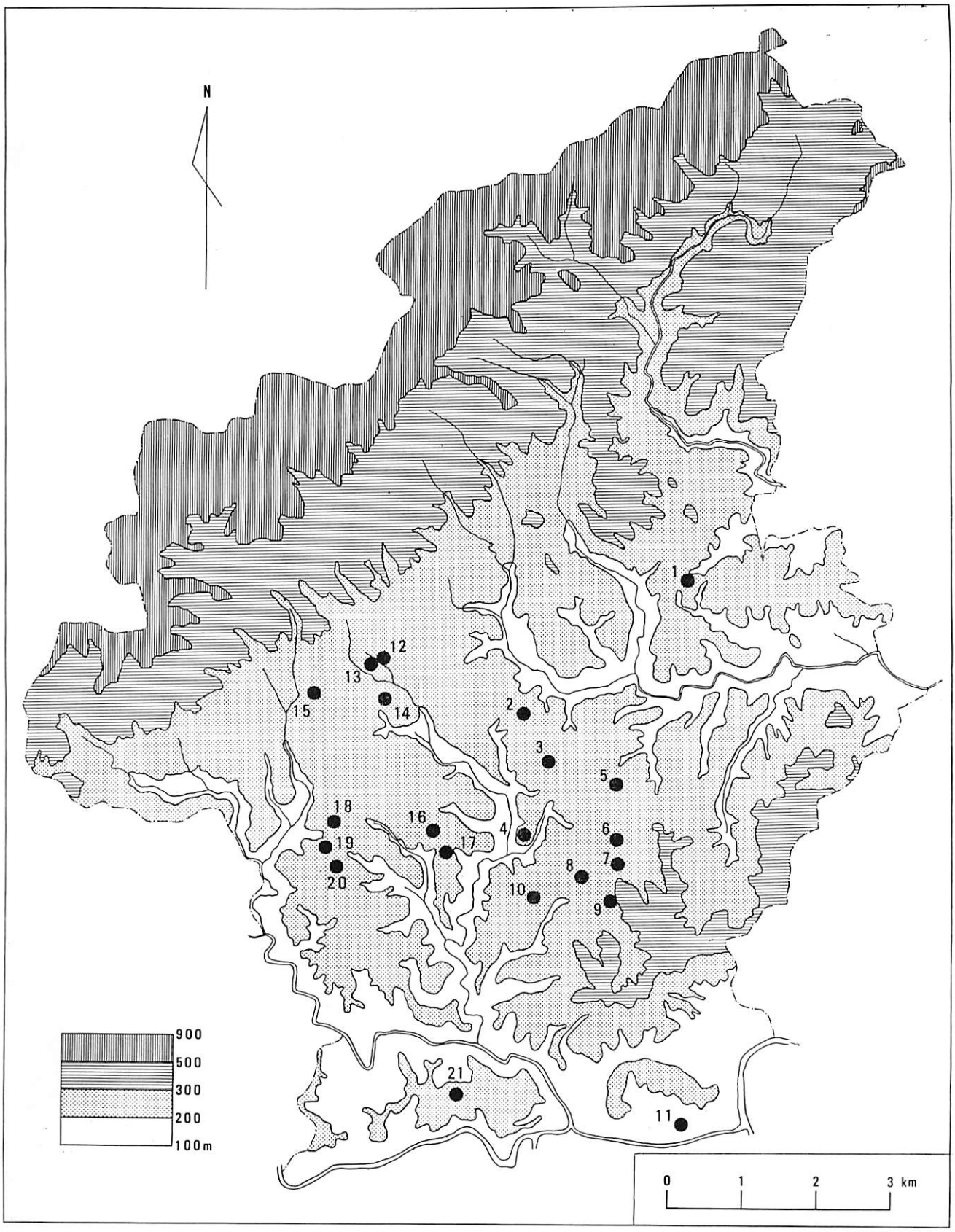
1．2　細石刃核（実大）　3～6　スクレイパー



ナイフ形石器（実大）

旧石器文化　西寄りの区には流紋岩のフレイクが第２，３層などに散見し，その上，第Ⅴトレンチ３区の第３層からは右写真に示すナイフ形石器が出土したので，作業の進行が早かったＩ７・Ⅴ７区をローム面まで発掘した結果，特にＩ７区において好資料を得た。

Ｉ７区において，ローム層の上部約 30 cm ほどの部位より，流紋岩製の細石刃核２点，スクレイパー４点，及び若干のフレイクが出土している。点数も少なく，細石刃が未検出であることなど不完全な資料であるが，興味深い内容をもっている。周辺に発掘範囲を拡大すれば好資料を追加し得るはずである。Ⅴ３区出土のナイフ形石器は時期を異にすると思われる。



大野町内における石器時代遺跡分布図

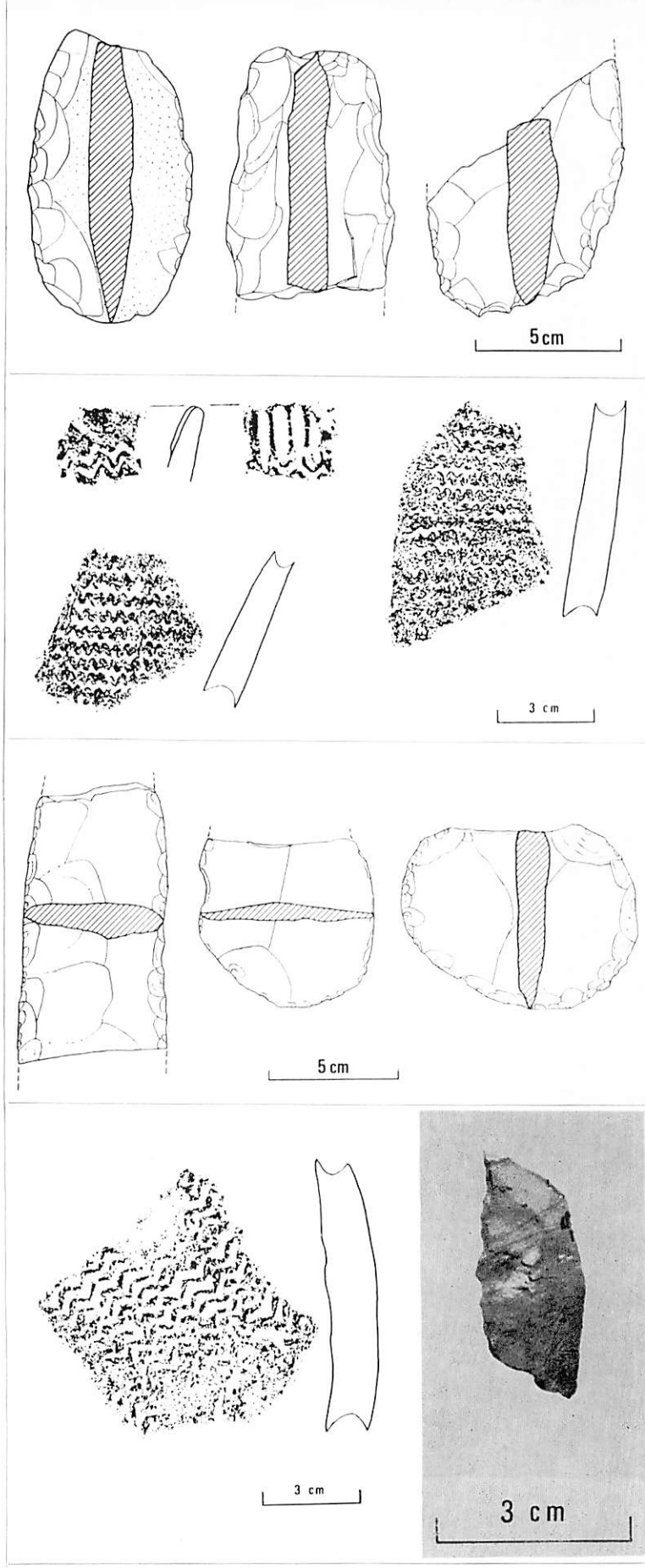
大野町の地勢は巨視的に標高 200，300m 線をもって把握される。100～200m は平地で水田が開け，200～300m は丘陵地帯で畑作が盛んであり，300m 以上は山地である。石器時代遺跡はこのうちの丘陵地帯に集中している。

大野町内石器時代遺跡地名表

1．光昌寺（縄文晩期）
2．犬山（縄文）
3．大塚（旧石器，縄文）
4．松木（縄文）
5．片島井野（縄文早・晩期）
6．宝福寺（縄文早・晩期）
7．大野宮司宅裏（縄文）
8．**宮地前遺跡**
9．上津社（旧石器，縄文早期）
10．中原木元（縄文）
11．徳尾（旧石器）
12．製糸工場裏（旧石器）
13．大野高校敷地内（旧石器）
14．城山（縄文）
15．門前（旧石器，縄文）
16．駒方北（旧石器，縄文後・晩期）
17．駒方南（旧石器）
18．虎ケ迫（縄文）
19．大原北（縄文）
20．大原南（縄文）
21．原古殿（縄文晩期）

分布図に示すように，遺跡は主に200～300m の丘陵地帯に分布している。すなわち畑作地帯である。分布調査に当っては賀川光夫・羽田野一郎・鳥飼孝好の3先生に御協力頂いたが，私共が十分に時間をもてず未完成のままである。しかし上記のような遺跡のあり方は，洞穴遺跡を除けば将来とも大きな変更はないように思われる。

ところが近年この地帯に畑地灌漑による開発が強く進められようとしているのである。遺跡保存に十分な配慮が望まれる。



上より　犬山出土打製石斧
宝福寺出土押型文土器片
駒方出土打製石斧・スクレイパー
上津社境内採集押型文土器片（黒色土層）及びナイフ形石器（ローム層）

あ　と　が　き

宮地前遺跡の全体からみれば，今回の発掘は地点も面積もごくわずかであり，今後継続して発掘調査を行なう必要性は高い。しかし一応黒色磨研土器文化の内容に関する全般的な資料を得るという所期の目的は達せられたとみなされる。

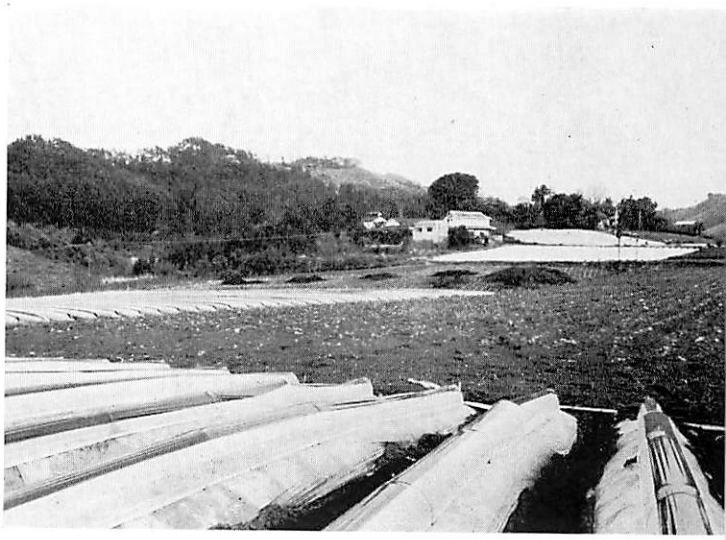
遺物の主包含層は，表土層より数えて第３層にあたる。第２層は攪乱を受けているが，第３層は縄文晩期初頭の晩期Ｉ式（大石式）期を主体とする包含層である。そのほぼ中位からやや下位にかけて，生活面が認められる。おそらくこの面から掘り下げられたと考えられる竪穴住居址の一角が検出された。覆土中出土の土器片には，若干の弥生式土器片を混じえるが，弥生時代の竪穴住居址とみなすほどの量ではなく，極部的攪乱を想定させる程度である。したがって断定はできないが，縄文晩期の竪穴住居址である可能性はきわめて強い。今後全体を完掘し，その明確な時期，プランを確認し，さらには集落全体を把握していきたいものである。

九州における縄文晩期の竪穴住居址は，従来の検出例はわずかに１，２例のみであり，まして集落景観の復元にはほど遠い。その一方東日本の中期等では円形集落が続々と全掘されている。しかし弥生時代のそれとは相違点が多く，当然西日本晩期の集落が問題になってくる。西日本晩期の村落の復元，さらに社会形態の復元を行なうことは，縄文文化はもとより弥生文化の研究にも重要な意味をもっているのである。

土器以外の出土遺物は，ほとんど石器である。その多くは打製石斧であり，他に石鏃・石皿・たたき石・すり石等である。これらは一見東日本の中期の組成と同一である。この事実は卒直に認める必要がある。九州の晩期と同様初期農業の可能性を指摘されている時期であることにも共通性がある。しかし打製石斧を分析すると，東日本的な短冊形のＡ類と，扁平打製石斧とよばれるＢ類とがある。また東日本に多い分銅形石斧等を伴出していない。これは九州晩期の重要な特徴であり，かつ賀川光夫教授等の初期農業存在仮説の重要な論拠の一つともなっている。しかしこれに伴う打製石庖丁の明確な例は，ついに検出できなかった。隣接する緒方町大石遺跡の石器組成との重要な相違点である。当遺跡の特殊性として結論づけるよりは，今後の調査に問題の解決を残しておきたい。

全般的な結論として，九州晩期農耕論は，大陸との比較検討はもとより，国内において東日本の中期農耕論との比較検討をも，一層推める必要があると考えられる。

発掘後の整理作業及び概報の準備には，別府大Ｏ．Ｂ．の小池史哲氏には特に熱心な協力を頂いている。銘記して謝意を表する次第である。



遺　跡　遠　景

参加者氏名

渡辺　誠（平安博物館考古二課）
片岡　肇（平安博物館考古二課）
鈴木忠司（平安博物館考古一課）
小池史哲（別府大学文学部）
平ノ内幸治（別府大学文学部）
永松みゆき（別府大学文学部）
瓜生田文子（別府大学文学部）
木村幾多郎（九州大学大学院）
高橋　徹（九州大学文学部）
川端敏史（同志社大学文学部）
長谷川　豊（同志社大学法学部）
上羽明美（関西大学文学部）
山下秀樹（慶応義塾大学文学部）

□参加協力された以上の諸氏をはじめ発掘調査を快よく許された甲斐茂幸氏及び多大な援助を与えられた別府大学賀川光夫教授，大野町教育委員会，中部小学校羽田野一郎先生，竹田高校鳥飼孝好先生，河野正光氏に対し，衷心より謝意を表する次第である。

大分県大野町宮地前遺跡発掘調査概報

発行日　1973年10月7日
編集者　平安博物館考古二課　渡辺　誠
発行者　平安博物館
京都市中京区三条高倉
振替　京都850番　電話 075(222)0888
頒価　300円（送料55円）

制作・ビクトリー社